

て地に隣れ、頓に命終る。見聞く人云はく「刑を加へざれども、皆る心をもちて言を効びたれば、故に口喞斜み忽然に死ぬ。何にいはむや、怨讎の心を発し刑罰を加ふるはや」といふ。法花經に云はく「賢き僧と愚なる僧と、同じき位に居ること得ず。また長髪の比丘は、白衣の髪鬘を剃らざるよりは賢し。同じき位同じき器を用ゐること得ず。もし強ひて位せば、銅炭の上に居、鉄丸を呑み、地獄に墮ちむ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

心経を憶持てる女現に閻羅王の闕に至り奇しき表を  
示す縁 第十九

利苾優婆夷は、河内国の人なり。姓は利苾村主なり。故に以ちて字とす。天年澄める情あり。三宝を信敬ひて常に心経を誦持ち、以ちて業行とす。心経を誦む音はなはだ微妙し。諸の道俗に愛樂びらるるなり。聖武天皇の御世に、是の優婆夷夜寝て病まずして卒爾に死に、閻羅王の所に到る。時に王見たまひて、床を起立て蓐を敷きて居ゑたてまつりたまひて、語りて曰はく「伝へ聆く、能く心経を誦みたまふことを。我れ声を聴かむと欲ひ、暫頃請へたまつるの

み。願はくは誦みて聞かせたまへ」とのたまふ。すなはち誦む。王聞きて隨喜したまひ、坐より起ち、長跪きて拝みたまひて曰はく「貴きかな、当に聞くが如く有す」とのたまふ。三日を逕て、告げてのたまはく「今過に還りたまへ」とのたまふ。王の宮より出づ。門に三人有り。黄なる衣を著たり。優婆夷に値ひて歡喜びて曰はく「ただし瞥のみ觀え、比頃隣えず。故に吾れ恋ひ思ふ。何すれぞ偶に今逢ふ。往け。速に還れ。我れ今日より三日を経て、諸樂京の東の市の中にならず逢はむ」といふ。別れて還る。纔見れば更甦るなり。三日の朝に至りてなほ故に京の東の市に往かむと欲ひ、往きて市の中に居て終日に待つ。待つ人來らず。ただし賤しき人市の東の門より市の中に入り、經を賣るに銜して売り、告げて言はく「誰れか經を買はむ」といふ。優婆夷の前を遮り歴きて過ぎ、市の西の門より出で往く。優婆夷彼の經を買はむと欲ひ、使を遣りて還らしむ。經を開きて見れば、彼の優婆夷の昔時写し奉れる梵網經二巻と心經一卷となり。供らずして失せ、多くの年を逕て求め諮へども得ず。心の内に歡喜び、經を盜める人なることを知り、なほ忍びて經を問ひていはく「直は幾何ならむぞ」といふ。答へていはく「巻別に直錢五百文ならむとす」といふ。乞ふに隨ひて買ふ。是にすなはち知る、逢はむと期れる三人の者は、

一 仏典語。たとえは妙法蓮華經・信解品にみえる。二 上巻十九縁、下巻二十縁、に引用されている妙法蓮華經の文を参照。三 怨讎の心をおこして刑罰を加えるばあいのことはいふまでもない。四 此の引用文は妙法蓮華經・正法華經・添品妙法蓮華經にみえない。五 比丘は剃髪した。増一阿含經・二十六に沙門出家の五つの毀辱の法をあげて、第一に頭髪長として増一阿含經を引くことからも理解されるように、「長髪」は惡比丘の相。

第十九縁 あやしき表(い)の説話。今昔物語集・十四ノ三十一に書承。

未詳。本説話以外に所伝をみない。優婆夷は、三婦五戒を受けた女子の在俗信者。七衆のひとつ。七 延喜式・神名帳では、古市郡現羽曳野市に利僞神社がみえ、羽曳野市に戸刈池が現存。聖武天皇代には河内国洪川郡竹淵郷現八尾市に利苾村主麻呂がいた(船連石立の勘籍にみえる)。八 慧皎の高僧伝・十三に經師の項が立てられ美声で説經で名を得た者三十四人(正伝として十一人、付説する者二十三人)があげられている。日本では、養老四年(七二〇)十二月二十五日の詔に、僧尼が自ら方法を案出し別音をおこなつたために近來転經唱札がみだれているので道榮、勝曉らに依拠せよ、とみえる(続紀・類聚三代格・三)。また、延暦二年(七五三)十一月六日の太政官符によれば、僧尼が悔過の座にて「哀音」を発して高叫することがあったことがわかる(類聚三代格・三)。たんに美声のみであらう旋律のくふうも、利苾優婆夷にはあったであろう。九 原文為「諸道俗所愛樂也」。被動。一 上巻

八縁。一〇 「床」は坐具。「蓐」は敷物。動物の皮製、あるいは植物製のものもあった。蓐の上に優婆夷は現代の正座のようなすわり方ですわつたのであろう。二 他人の善行を見聞して喜ぶこと。喜ぶ人の功德にもなる、とされた。仏典語。妙法蓮華經に隨喜功德品がある。三 相手に対して尊敬の気持ちをおこす動作。原文從「坐而起」。仏典に多くみえる表現。たとえば妙法蓮華經・勸持品に「從座而起」。三 一 上巻十八縁。

四 三人は下文によれば經卷の化身。黄衣は、きただで染めた写經用の紙(黄紙、黄麻紙)を連想させる。五 上巻三十五縁、中巻十七縁、など類似表現を含む説話はいづれも女が主人公。舞台も近接しているといえる。

六 官設の市。平城京の左京に東市、右京に西市、がひらかれていた。東市は左京八条三坊にあった。毎月十五日以前は東市、十六日以後は西市がひらかれた(延喜式・東西市司)。正午より日没前までが開設の時間(開市令)。

七 見るとすぐに。「纔」は、一すると同時に、の意。八 すわって。

九 店を構えずに売り歩いて売る。仏典に多くみえる。たとえは妙法蓮華經・安樂行品。三 梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十巻が上下二巻に調卷されたもの。鳩摩羅什の訳、として伝承されたが、中国で撰述されたもの。

三 写經した經卷を供養しないうちに、その經卷がなくなった。

三 貨幣価値に関しては中巻六縁参照。大正新脩大藏經は一行十七字語でありこれが当時の標準的な寫經の字語のながだが、それによって行數(首題、尾題、記者名、などは除外)を示すなら

今のすなはち是の經三卷なりといふことを。会を設け講き讀みて、ますます因果を信ひ、慇懃に誦み持つこと昼夜息まず。噫呼、奇しきかな。涅槃經に云ふが如し「もし見有る人善を修行はば、名天人に見れ、惡を修行はば、名地獄に見れむ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

惡しき夢に依り至誠心をもちて經を誦ましめて奇しき表を示し命を全くすること得る縁 第二十

大和国添上郡山村里に、一の長いたる母有り。姓名詳ならず。彼の母に女有り。嫁きて二の子を生む。聾は官に県の主宰に遣さる。因りて妻子を率て任けらるる国に至り、歳余を経たり。ただし妻の母は土に留り家を守る。儼に女の為に夢に惡しき瑞相を見、すなはち驚き恐りて念はく「女の為に經を誦ましめむ」とおもふ。而れども家貧しきに依りて敢てすること得ず。心の念に勝へずして、自が著たる衣を脱ぎ、洗ひ淨め、擎げて奉として經を誦ましむ。然れども凶しき夢の相またなほ重ねて現る。母ますます心恐りて、また著たる裳を脱ぎ、淨洒めて先の如くして經を誦ましむ。女は任けらるる県の

国司の館に在り。生める子は館の庭の中に遊び、母は屋の裏に居る。二の子七の僧有りて屋の上に坐て經を讀むを見る。二の子母に白して言さく「屋の上に七軀の法師在りて經を讀む。邊に出でて見るべし」とまうす。彼の經を讀む音聲の集り鳴くが如し。母聞きて怪び、起ちて後屋より出づ。すなはち常に居たる処の壁仆る。また七の法師忽然に見えず。女大に恐り怪び、自づから心の内に念はく「天地吾れを助けて壁に圧はれず」とおもふ。後に家を守る母、使を遣りて到り問はしめ、凶しき夢の状を陳べ、經を讀ましめたる事を伝ふ。女母の伝ふる状を聞き、大に怖りて心通ひ、ますます三宝を信ふ。すなはち知る、誦經の力と三宝の護念とを。

攝の神王の跣光を放ちて奇しき表を示し現報を得る縁 第二十一

諾樂京の東山に、一の寺有り。号けて金鷲と曰ふ。金鷲優婆塞斯の山寺に住む。故に以ちて字とす。今東大寺と成る。いまだ大寺を造らざる時に、聖武天皇の御世に、金鷲行者常に住みて道を修ふ。其の山寺に一の執金剛神の

は、梵網經は一〇六〇行、般若心經は十七行、である。いずれも小部の經典である。高価格と見える。

一大般涅槃經・師子吼菩薩品。上卷二十七縁にも引用。

第二十縁 あやしき表(い)の説話。三宝給・法十二に引用。

二(至誠心(觀無量壽經)。中卷六縁にもみえる。三奈良市山町あたり。

四原文「長母」。中卷四十二縁にもこの語がみえる。他に例を見ない語であり、その意味は正確にはわからない。「父母」の語と関係あるか。五国司。「県」が下文のように「任けらるる国」を意味する例に、土佐日記「県の四年五年はてて」がある。

六どの国であるかは未詳。任国を特定できる記述は本説話には含まれていない。

七国司の任期は、通常は四年とされた(統紀・慶雲三年(592)二月十八日格)。

八原文「見惡瑞相」。「瑞相」は善いしるしを意味するばあいも、悪いしるしを意味するばあいもあつた。後代の方丈記にも「世ノ乱ル、瑞相」の例がみえる。表現を「夢見惡瑞相」「凶夢相」「凶夢状」と変化させている。

九僧を誦じて誦經してもらふということができない。布施する物が無かつたのである。一〇衣を布への布施として、僧に誦經してもらつた。本説話の標題に「使誦經」とあることより推して、長母が自分で誦經したのではなく僧に誦經してもらつた、と考へる。下文に、多く「しむ」を補説した。布施する物を持たない貧人

が自分の衣服を施した例に、賢愚經・五・貧人夫婦難施得現報品、現報當受經、などがある。

二まず衣、次に裳、という例は中卷八縁。ここで政務を執つたのではない。国司の生活する建造物に守館、介館、などの「館」があつた。

三「七」という数字は誦經した經の巻数にかかわるであろう。七巻本の妙法蓮華經が誦經されたか。

四母屋(い)の後方にはり出して建てられている建造物か。

五建物からあわててとび出したとたん、すぐに建物が崩壊した例に、搜神記・二・夏侯漢、同・一・費孝先、敦煌本搜神記・劉安、などがある。

六上卷二十三縁に「天知地知」、中卷三縁に「仰天哭願」、とみえる。いずれも母と子の説話である。

第二十一縁 あやしき表(い)の説話。善業についての現報説話。今昔物語集・十七ノ四十九、扶桑略記・天平二十一年(西九条)に書本。

七「中卷十二縁」。

八「北門両辺作二神王、一名毘沙門、一名執金剛(二不空羼索陀羅尼經)。「執金剛神王」という表現は、大品般若經・十七、大智度論・七十三、などにみえる。

九「金鐘寺(東大寺要録・四)ともいう。三未詳。日本書紀・大武天皇十四年(六六)十月八日条にみえる優婆塞益田直金鍾」を擬する説は、年代的に問題がある。

十本書で「行者」と称されているのは優婆塞。

十一現存。塑像。国宝。